第10期県民生活審議会 第４回総合政策部会（概要）

１　日　時　　平成２７年７月２２日（水）１３：３０～１５：３０
２　場　所　　ひょうご女性交流館　５０１会議室
３　出席者　　委員：鳥越会長、小西副会長兼部会長、岩木委員、木田委員、北川委員、野崎委員、水田委員、森委員、山崎委員、山下委員、吉田委員
県側：西上政策創生部長、東元県民生活局長、渕上県民生活課長、久戸瀬協働推進室長、小藤県民生活課副課長、県民局・県民センターほか関係職員

４　内容

（１）政策創生部長挨拶

○昨年から３回にわたり部会を開催し、いろいろなご意見を賜っているが、今年は提言として取りまとめるサイクルに入らせていただく。

○本日は大きく２つのまとめをさせていただいている。１つはふるさと意識の醸成のためと、ふるさとのための活動の活性化の観点から、もう１つは、今後、さらにふるさとづくりを具体的にどう進めていくかといった観点からである。

○６月定例会で県会から、今後、参画と協働を基本としながら、どのようなふるさとづくりを進めていくのかというご質問をいただき、知事は、ふるさとを愛していただき、誇りを持つ多くの県民の方々と地域の未来に向かって取り組んでいきたい、という答弁をさせていただいた。

○今期の提言が、今後の県政の方向性に合致しているものと考えており、地域創生を進めるにあたっても、ふるさとづくりは１つのキーワードになると思うので、今後の審議を経て提言をとりまとめていただくようお願い申し上げる。

（２）審議事項

（部会長）

本日は、これまでの全体会・部会での議論を踏まえて作成した提言について、審議していきたい。

（資料説明）

○事務局から資料に基づき説明

（３）意見交換

〈三世代や多世代のつながり〉

○高校生アンケートで「やる気はあるが何をしていいかわからない」「どこにとっかかりを求めていいかわからない」とあり親世代と似ているが、三世代同居をすると、子どもも親も一から人脈をつくらなくてよいので、上の世代からの声かけが気軽にあり、何をしていいかわからないとはならないと思う。

○地域の役に立つことが自然に出来てくるのではないかという意味で、三世代のつながりは大きいと思うが、今はマイナスイメージになっていて、これをプラスイメージで発信していくことが県として出来ないかなと思う。

○三世代同居をすると、親世代に時間的なゆとりができて、短時間のボランティアも出来るので、ちょボラなども活性化するのではないかと思う。
○三世代のつながりは、実際の親子のつながりをより強固にするという意味なのか、地域の中にいる三世代を、バーチャルであっても、つながりを強くしていくという意味なのかがわからない。
○１つのコミュニティ、１つの自治会の中で、三世代でいろいろなことが出来るのではないか。ある自治会で、小学校の子どもを放課後公民館に集めて、おじいちゃん、おばあちゃんが見ている事例があり、ひとつの自治会の中で三世代をつくっている。
○ソーシャルファミリーという名前を提案していきたいと思っている。社会的家族、本物の家族ではないけれども、いろいろな世代が関われるような仕組みをつくって、みんなのおうち施策というのを考えている。

〈ちょボラについて〉
○６０代ぐらいの世代がボランティアをする時のちょボラと、若者がちょボラをするのとでは全く意味が違うと思う。
○若者のちょボラを促進しても、人が育っていない状態なので、それだけで満足感を得てしまう。気楽に参加できることは、気楽に離れていくということなので、ふるさとづくりなどには定着しないと思う。
○ちょボラという言葉を使うのであれば、ある程度世代のイメージをわけた方がいいのではないか。若い世代には違う言葉や違う考えで定着していくように考えた方がいいと思う。
○短時間でこれだけのことしてくれますかというボランティア活動の投げかけ方は当事者意識を生まず、単なる時間の切り売り、労力提供で終わってしまい、ふるさと意識の醸成にどうつながるのか疑問なので、若い世代も含め地域について考え、問題意識を掘り返していくことに力を注ぐことが必要だと思う。
○忙しくて時間をさくことができないが、関わりたい意識を持っている人にはちょボラは必要だと思うので、まちづくりに関われるようなチャンネルを地域自体が作っていこうとする発想を持てるように投げかけていくことが大事ではないかと思う。

〈外の人とつながるという視点〉
○若者が、他地域の人たちと交流する中で、自分の地域のことを顧みている。地元の若者も、外から見た同じ世代の人たちの意見をもらう中で、自分たちのふるさとをもう１度見直すということができている。
○地域が外へ向けての視点をどう持つかということが入ったら、面白くなると思う。
○若者は大半は外へ出るから、それを食い止めようとするのは難しいが、地域を離れた人とつながり続けることもひとつの施策として盛り込んだらどうか。
○何年かに１回、同窓会は地域の旅館を使ってもらい、そこに助成金を出すなど、外へ出た人としつこくつながり続けることが、地域の活性化につながるのではないか。
○地域のお祭りの担い手がいなくなっているので、祭り応援隊のようなものを募集して、どんな地域の人でも参加できるというのを施策にしたら面白いのではないか。

〈子どもたちのふるさと意識を醸成する〉

○標準だと思える家族のモデルパターンでふるさと意識の醸成と言うだけではなく、恵まれない家庭環境の子たちも違いを認め合い尊重し、ここで育って良かったなと思えるように地域が関わるということまで考えなければならない。

○「ふるさと」とは何かを考えた中で、子どもたちに町の幼稚園や小中学校で勉強していることを自覚してもらうのが一番いいのではないかと思う。

○みんなで取り組むべき課題があって、そこに多世代の人が一緒に取り組むような仕組みを作れば、自分の家で家族というものが経験できない子どもたちも、社会の中で家族的な経験が出来るのではないか。地域で育てていくということを具体的に施策にしていけばいいと思う。

○昔は幼い頃から講や青年団などで関わりながら地域の一員になっていくプロセスが生きていた。その辺りが無くなっているので、あえてそのような事を考えないといけない時代になっていると思う。

○地域のことを知るという要素がないと、ふるさと意識には結びつかないので、そこが一番キモだと思う。地域の人と直接関わったり、地域を歩き回って発見したりというような、自分が主体となって関わっていく体験をして、地域の一員だという思いを持てる形で地域と出会っていくことも必要だと思う。

○学校ですでにいろいろな取組が授業や体験学習等で行われているが、どれぐらい成果があがっているのか、住んでいる地域や学校のある地域への理解を深めているのかを点検し、組み立て直してもいいのではないか。

○生まれ育った地域はこういう所で、このような難しいことを抱えている、ということきちっと教えると、大人になって地域を出ても、地域に対する関心は薄れないという考え方もあるのではないか。

〈若者のふるさとづくり〉

○若者が都会から帰ってきて起業するだけでも地域のためになっていて、都会から同郷の友だちを呼んで生き生きと頑張っている若者が増えるだけでも地域の活力になるので、「ふるさとのために活動するという」いう言い方は、「地域で活動する」というだけでも十分意味としては使えるのではないか。

○若い世代に目を向けた政策をつくっていけば、長く続いていくのではないか。

○今の子たちはコミュニケーションが取れなくなっているが、そうして大きくなった子たちが二十歳を過ぎてから、いろいろな刺激の中でもう１度ふるさとを見直すようなことがあると思う。

○資料中に地域へのインターンシップというプロジェクトが入っているが、ウィンウィンではない。大学生のウィンが少ないと思う。

○自主的に物事を考える力が若い人は弱い。そういう力をどこかでもう１度作り直ししないと、地域がばらばらになってしまう。

○演劇教育は大切で、自分の役割を知ることができる。役割をわかちあって 1 つの物事を作るという文化や教育をもう１度やり直して、それを何歳ぐらいで、どんな子たちに提供すればいいかを議論すべきだと思うし、それを通してどんな若者を育てたいのかという若者対策が必要だと思う。

〈これまでの提言との違いを明らかにする〉

○過去に同じようなことを提言してきたと思うので、うまくいかなかったり、うまくいった事例が反映されるような提言にならないと、前進にならないのではないか。

○起業家を育成しようとして今までどのようなことをしてきたのか、うまくいかなかった事例や、施策として成功した事例を検証した上で、今回の提言ではここに力を入れるということが前に出てきた方がいいのではないか。

○今までの提言との違いは、若い世代、特に高校生が地域づくりの担い手という意識を持って、その人たちが参加しようと思える雰囲気を作れないだろうかということと、家族形態の変貌に対応して、様々なタイプの家族が楽しく生活できる仕組みを地域で考える必要があるということではないか。

○焦点を絞ってまとめいけば、これまでと違うものになるのではないか。今回はどこに焦点を置いて、どのような世間の変貌に対応してふるさとづくりや地域創生などに取り組んでいこうとしているのかを前面的に押し出した方がいいのではないか。

〈世代のターゲットを絞る〉

○若者世代にターゲットを絞った取組みということを意識した方がいいのではないか。

○違いを認め合い尊重するというのは、地域の中の世代間のところで意識すべきではないかと思う。若者を前提にして考えると、やりたいことを自由にやらせて欲しいといった部分があるのではないか。その意味でも、ターゲットを絞って提言を組み立て直したらどうか。

○この提言は良くまとまっていると印象を持ったが、網羅性を優先した結果、若者だからという特徴が消えてしまっているので、これを何とかする必要がある。

○今の提言は面白みが少ないが、若者に焦点を当てると表現が変わり、結構まとまるのではないかなと思う。

〈高校生に焦点を当てる〉

○高校生ぐらいが、地域の中にある様々な問題を、いろいろな人と関わりながら問題意識をどう持つのかというところに、どのような仕掛けを持っていけるかを考えていかなければならない。

○高校生ぐらいの若い人たちが、ちょっとだけ離れている世代の人の後ろ姿を見ながら、一緒にやっていこうという仕組みを作り、ふるさとづくりや地域創生というところに取り込んでいけばどうかと思う。

○去年の審議では、大学等で一旦外に出た人たちが地域の持つ課題に気づくという場合が多く、その人たちがパワーのある高校生たちに声をかけて地域を盛り上げるイベントなどをして、高校生がイベントの成功を体験したら、彼らが今度は活動の担い手になるだろということではなかったかと思う。

〈若者が起爆剤〉

○理屈なく若者に焦点を当てると、次回はそれ以外の世代に焦点をあてた政策が欲しくなるが、若者がふるさとづくりの起爆剤になるという論点だったら、次は別の世代という発想はしなくていい。若者が起爆剤になり、すべてのものを変えていくとするなら、その論理をつくる必要がある。

○「若者の力を起爆剤にする」という部分が不器用になっている。どこにポイントを置いてこの提言はこんな事を言っているという、一言で言えばこれだという何かが欲しい時に、若者のところをどうさわるかを考える必要がある。
○若者を起爆剤にするということなら、それを受けた提言というのを何か盛り込めないかと思う。高校生あたりをターゲットにしたものだという事がわかるようにまとめたらいいのではないか。
○若者に焦点当てるというのは前から言っていたことで中心に据えるのはいいと思うが、従来とは違う考え方をしていかないと、若者の力を起爆剤にはしていけないのではないか。

〈提言にイベント等を盛り込むことについて〉
○この提言は平坦であって、若者に焦点をあてているが面白みがないので、もう少し具体的にこれをしましょうと言えるようなものがあればいいと思う。例えばイベントなどはどうか。
○高校生はイベントに主体的に関わろうとすることが残っているが、大学生は自分たちがしんどい思いをしなければならない、時間を作らないといけないと後ろ向きになっている。大学生と高校生の世代はわけるべきではないか。
○大学生はイベントがライフスタイルにつながらない。その先の仕事・就職や起業とかにイメージが繋がるものを考えてもらいたいと思う。
○若い人のたまり場がどこかというと、新たな場所にイベントなどで若者を呼んできても、終わったら集まらなくなるので、今、若者達が集まっている場所に働きかけることが必要だと思う。
○イベントは目に見える形で、若者に役割を与えることになる。どのような形で若者に役割を与えていくかということを、このふるさとづくりで考えていけばいいのではないか。
○イベントは地域に対する知識や関心に繋がらず、一過性のものに終わっているものが多い。それを次にどう繋ぐかということを考えないでやっても仕方がないと思う。その辺りもこの提言に盛り込めるのであればいいのではないか。
○イベントなどは単なる方法なので、それをする時に大事にすべきポイントみたいなものを提言に盛り込んでいくことが必要だと思う。

〈担い手論について〉
○今期提言として、ふるさとづくりの担い手に焦点を置いてはどうか。高校生ぐらいの人たちが元気に活発に活動できるような素地をつくるのにはどうしたらいいのかがポイントだと思う。
○地域を活性化させるイベントや行事をどのようするのか、何を焦点に人を集めるのかは別の機会に考えてもいいと思う。今回は担い手について考えればいいのではないか。何もかもいっぺんにやろうとすると、総花的になってしまう。
○どこに焦点を置くかというと、今回は担い手であって、それも若い人、高校生あたりの人たちをターゲットにおいたらどうかと思う。
○論理なしで突然若者が担い手だというのではなく、そうするためには前に論理がいるのではないか。

○若者が担い手であるということではなく、若者が担い手としてキーになっていて、キーとなる若者が活動できるような場所や仕組みをつくろうということである。

〈ふるさとづくりの手法〉

○「ふるさとづくりをさらに進める手法」についての提言を重ねて書いていることがわからない。多様な関わりを様々な世代の人たちができる場をつくる、地域への問題意識の掘り起こしからスタートするなど、アプローチの仕方に限らないと、別枠であげる必要があるのか疑問に思った。

○前期提言のさらに詳しい具体的な方策として、これまでの意見を網羅していき、継続してやるべきことを１つの提言としてまとめた。それを、より効果的に進めるための手法、仕組みのようなものを、さらに突っ込んだ形でまとめさせていただいた。（事務局）

○若者に焦点を置いて提言を作りたいという時に、どういう論理構成をするか、ある種の手法が欲しい。担い手として若者が大切であれば、このような事が考えられるのではないかという例示や論理があれば手法になるのではないか。

○手法の中には担い手論が入っていいし、担い手論になっても手法が入らないとだめなので、うまくバランス良くはめ込めればいいのではないか。

○これまで地域のことをしてきた人の枠組みの中に若者をひっぱってきてくるのではなく、若者に任せて、一定の役割を与えて、手応えを感じてもらうやり方をしていく、といったものが入ってくるのではないかと思う。

○若者がイニシアチブをとってやろうと思うのにはどんな仕組みが必要か、周りの地域の人たちはどうサポートするのかを考えなければならない。

〈提言のとりまとめ方〉

○兵庫県全体で考えると、地域にはいろいろな側面があるので、それを全部まとめてどうするかという話ではなく、ここはこのような道具があるのではないか、という辺りまで取り上げられたらいいなと思っている。

○兵庫県は多様性があることが良い部分だと思う。地域のつながりが非常に濃い地域と、近所付き合いが希薄な地域をひっくるめてまとめようとすると、総花的になってぼやけてしまう部分があるのではないか。いろいろなセクターみたいな形で、こういう所にはこういうことを期待するというような切り口も考えられると思う。

○前期提言の概要から出発することはいいと思う。

○あまり具体的なことを盛り込むとまとまらないのではないか。地域ごとの特性に合わせて、このような手法を使ってやっていけばどうかという形にまとめられないかと思っている。

○ポイントは、後半部分の提言のパーツだと思うので、３つの提言の柱立てを作り直してみてはどうか。高校生に対して地域の魅力、課題をどう理解してもらうかということにからむような提言ができないかなと思っている。

○担い手のうち特に若者、高校生ぐらいにもう少し働きかけをする必要があるということを課題のひとつとして出して、その上で提言のひとつとして、若者の主体性を大事にしたイベントなどを沢山しようと盛り込んでいただけないか。

（４）県民生活局長挨拶

○本日は、熱心にご審議をいただき、お礼申し上げる。

○総花的なまとめ方になっていた部分があったので、焦点をしぼりながら再度まとめ直しをして、次回部会に諮らせていただきたい。

○今年度は参画と協働の推進方策の見直しの時期が来ている。これまでふるさとについてご議論いただいた内容なども、推進方策の見直しの中で反映し、参画・協働推進委員会でご意見をいただきながら、来年 2 月には改訂版という形でまとめていきたいと思っている。

○ふるさと意識の醸成は、地域創生の中でも非常に基盤の部分になってくることから、しっかりとまとめてあげていくので、引き続き、ご指導をお願い申し上げる。